

## 連載

＝褥瘡（じょくそう）③＝  
～生兵法が感染症を招く…？～

三戸呂 克美

キズが出来てそのままにしていたわけではない。今までにできたキズを治した（治った）事を思い出しては、その時使用した残りの薬を塗布したり、ネットで探しては処置をまねてみたりと、素人の治療で治るはずがないのに、そして、「生兵法は大げがのもと」のことわざ通り続けていたら見る見るうちに大きくなったキズ。そのキズを持って向かうはいつも診て貰うS病院。診察時に言われることは「除圧をしっかりやってキズ口は清潔にして下さい」である。そしてドレッシング剤となるディオアクティブを処方してもらった。

いつのころからかキズに対する治療方法が変わり、僕がケガをしたころ（昭和59年ごろ）はキズ口をとにかく乾燥さすようにしていた。入院中は病室の窓を開け差し込む日差しにお尻（患部）を向け、日時計のごとく太陽の動きに合わせて体をベッドごと変えていた。それが近頃は「完全密閉湿潤療法」と言ってキズ口は乾燥をさせずに自分の力（栄養豊富な滲出液）で治す方法に変わった。（時には乾燥させる治療も必要であるようだ。）

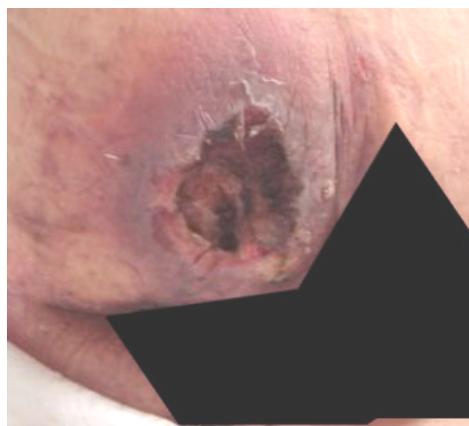
ここで私が犯した最大のミスを経験の解説を参考に述べてみよう。湿潤方法に使用するのがドレッシング剤である、と言うのは前述したが、キズの中で治りにくいものの代表が褥瘡と言われている。

それは、他のキズと違うのは、車いす上での生活が主流の頸損者では、圧迫が要因で発生するため、必然的にダメージが皮膚の全層（表面から内部）へ加わり深いキズになりやすい。それに、圧迫を完全に取除けない状況が続くこと、さらに、全身性の麻痺があり皮膚への修復に必要な十分な栄養が行き渡らないケースが多くなることも要因である。そのため、キズに対して理想的とされる「完全閉鎖密閉湿潤療法」が、最良の方法とはならない状況が発生する。図のように大量の壊死組織が存在する場合は、細菌感染を併発しやすい危険な状況であるため、この状況で「完全閉鎖密閉湿潤療法」を行うと、キズの悪化につながる。よって、ドレッシング材は、キズ其自然治癒過程を妨げる要因を取り除き、治癒過程を促進させ、最良の環境を保持できるものを選択する必要がある。

キズ口は清潔にすることが条件であるのに、私は、高価なドレッシング剤は高価な薬と思いこんでいたのが大間違いであり、キズ口に貼り付け、その上からフィルム状のテガダームで密閉状態にしていた。すなわち、細菌を培養していたのだ。それから間もなくして、顔色はどす黒く熱におかされうわごとを言うことになる。



⇒  
5日間で

*to be continued*